

未来志向ポスト創造都市 さっぽろへの展望



デーヴィッド・リンゼイー・ライト
札幌市立大学デザイン学部メディアデザインコース准教授

ニュージーランド/オーストラリア国籍を持ち、米国やインドなど様々な国で幼少期を過ごす。クイーンズランド工科大学ではビジネス学部の修士号、創造産業学部で博士号を取得。2010年から現職。専門の研究分野は主に創造産業/創造都市を背景とした未来学・未来思想研究で、未来像分析とその可視化に定評がある。日本では17年暮らしており、大阪、東京、函館市などを経て、現在札幌に居を構える。World Futures Studies Federation (WFSF) に所属。

※1 創造都市
市民が主体となり、創造的な文化の営みと革新的な産業活動によるまちづくりを行っている都市。2004年に文化の多様性を保持、世界各地の文化産業が潜在的に有している可能性を都市間の戦略的連携により最大限に発揮させるためのユネスコ創造都市ネットワークが創設されている。「創造都市さっぽろ」とは、06年に札幌市長が行った「創造都市宣言」にのっとり札幌市の取り組み。

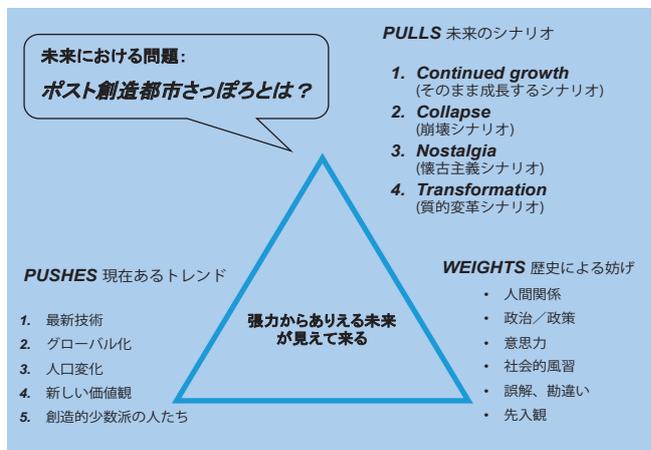
1 はじめに

本稿においては、未来学、創造産業学という二つの学問分野による方法論やコンセプトを利用し、札幌市の創造都市^{※1}としての未来の可能性を探る。

2010年3月、筆者は、札幌が真の創造都市へと変貌するために欠かせないいくつかの項目を含んだ未来像を部分的に構築した。その際、未来像全体の枠組みを描写するため、未来三角分析と呼ばれるツールを利用した。未来三角分析は、①Pushes = 未来に押し出す力/現在のトレンド、②Pulls = 具体的な未来像シナリオ、③Weights = 抵抗/未来においての実質強制的な障害物、の三つの要因から妥当かつ理想的な未来像を導き出す。

これらを融合し、本稿で提案する未来シナリオは、二つの目標を持つ。第一には、未来学・未来思想を利用し、自身にとって有益な活動を促す基礎となる十分な量の情報や知識思考を育むことである。第二には、創造都市及びその先のポスト創造都市の未来に対し、札幌という北海道にとって重要な街の未来のための、筆者自身の提案やスタイルを融合し、海外出身者として、最良を追及するクリエイティブタイプとして、学術的見地から未来志向のポスト創造都市さっぽろを提案することである。

筆者は、過去の歴史や現在、ないし未来に対し、どのように人々が没頭するか、未来という集合知に対してどう接するのかを研究する「未来志向システムの専門家」である。近未来問題という点で創造都市としての札幌に対する筆者の見解を述べる。



未来学者のソヘイル・イナヤトラ (2006) が導入した未来三角分析は、Pushes、Pulls、Weightsの三角による張力のバランスが未来の事物に影響する、というダイナミクスを図化する際に用いられる、代表的な未来学ツールの一つである。

日本は世界で最たる未来都市にならなくてはならない。そして、札幌市は日本の未来を牽引する代表的な存在の一つである。古くから札幌の発展は驚きをもたらしていたのは事実であるが、今は漫然かつ安易な、油断した空気に包まれているように感じる。この状態から、札幌が世界で最も未来志向の創造都市に変貌するためには何が必要か、助言をいくつかしたい。

筆者は大学の学生が制作する未来像の可視化・シミュレーションの教育に携わり、また、創造産業・創造都市研究の論文を書くことを生業としてきた。

そうした論文において言及した、札幌の次なる発展についての発言が“辛口”であるという多くのコメントが寄せられた。しかし、文化的発展はいわゆる「ヨイショ」に浸っているだけでは望めない。札幌は、新たに自己反すうと自己批判を取り入れることによって、ユーモアとゆとりをもった真の創造的繁栄を得ることができるのではないだろうか。

創造都市のコンセプトは良いものであるが、唯一絶対ではない。次の、そして次の次なる未来都市の波に対する視野を保つ必要がある。創造都市はあくまでも多くの未来像の一つでしかないが、最も創造的な部類の人々や、彼らが住む街を魅了し続ける可能性が高い。ゆえに、未来都市への視点を持たなければ、都市はほぼ確実に文化的下降線をたどることになるであろう。

今の時点で国際的に札幌の評価をするならば、お世辞にもまだ創造的都市とは言えない。札幌に残された道は、創造的都市に移行するためにいくつかの根本的な変貌を遂げるか、良いとは言えるが全般には平凡な都市で満足するかしかなないのである。

多くの札幌市民は本稿のアイデアを机上の空論と一笑に付すかも知れないが、あえて「変化は難しいが、停滞は致命傷である」(ピーター・ビショップ、未来学者)と言おう。

では、その変化をいかにして実現するのか。

2 PUSHES：現在ある原動力

そこで未来三角分析である。Pushesは、新しい技術、国際化、人口統計の変化、新しい価値観、そしてクリエイティブマイノリティー（創造的少数派と呼ばれる活動家たち）といった項目について、現在のトレンドを分析し図化するもので、同時にこれらが未来に対してどのように影響を及ぼすかを明らかにする。これにより、以下のような現在のトレンドが特定できる。

- 1) 特に若い人や技術者たちの日常生活、話す対象、新技術から生じる新しい「value ecologies（価値の生態系）」に大きな衝撃を及ぼすICTs（情報通信技術）。このICTsと新しいメディア技術が、多くのクリエイティブタイプの特徴を定義し、こうした人々が労働と娯楽を含む生活をどの場所に定めるかに多大なる影響を与える。
- 2) 札幌を新しいホームにしようと、世界からゆるやかに、しかし確実に人口の流入が起きる一方、札幌産のクリエイティブタイプがよりよい環境を求めて流出することも止めようがない。
- 3) 若い世代の札幌市民は、彼らの親世代と比較してまったく異なる価値体系を持っており、グローバル化したメディア、日本の有名人、環境に関する問題などに影響を受けざるを得ない。
- 4) 札幌の場合、2014年に創造的少数派が企画している“札幌ビエンナーレ^{※2}”という、すべての創造産業分野を包括するイベントがある。

総合すると、このような多くの札幌の複雑なトレンドである原動力は、社会変革に際し緩やかに現れ、街に期待と危険要素の両方をもたらす。

3 PULLS：向かう先の未来

札幌が真の創造都市たらしめるのであれば、自覚しなくてはならない事項がいくつかある。

通常、未来学者は、ディテールや体系的構造によって4種類に分類できる未来シナリオを作成する。①現状維持のシナリオ、②避けるべき最悪のシナリオ、③

※2 札幌ビエンナーレ

ビエンナーレはイタリア語で「2年に一度」の意味。2014年に札幌で開催予定の国際的な芸術祭。札幌を中心に北海道全体を視野に入れ、日常の衣食住やライフスタイルの中に、街の生活空間の中に、経済や産業なども含めた社会環境の中に、創造性というアートの力を都市の共通の資産として実らせてゆくことを目指している。

ノスタルジア／懐古志向シナリオ、④そしてもっとも重要な質的変革シナリオである。前の三つはSF映画なら格好の素材となりそうなのだが、ここでは後者の質的変革シナリオからいくつかの鍵となるアイデアを抽出して描写していく。

すでにいくつかの、未来志向ポスト創造都市さっぽろの構成要素は明らかとなっているが、創造都市モデルを作成するため、リチャード・フロリダ博士の、有名なTalent（才能・有能さ）、Technology（技術）、Tolerance（寛容性）の3要素から、街の創造都市度を測る3Tモデルを借りることとする。

(1) T¹：TALENT（才能／有能さ）

最初のTはTalentである。新しい産業のクリエイター、新しい思想や革新の伝達者として、他の有能な人々に及ぼす新しい「価値の生態系」を見出す人たちが当てはまる。

(a) Social Creativity：小さなcと大きなC

筆者は、ある場所がいかに柔軟かつ創造的な場所であるかを試す実験をしばしば試みる。

数年前、筆者がニュージーランドの小さな街にある、オープンしたてのカフェを訪れたときのことである。カフェの店員に「どんなコーヒーがありますか」と尋ねた。彼は「ここはカフェでございます。私どもはいかなるコーヒーでもお作りいたします。どのようなものがご所望ですか」と丁寧に返答してくれた。彼の爽やかな接客に、試しに「ユートピアのようなコーヒーを」と注文したら、数分後、メニューには載っていないコーヒーが運ばれてきたのである。筆者の昔の上司が1980年代前半にニュージーランドを離れた理由は「野心家には息苦しくて堪らない！」からであったが、以前の姿からはまるで想像もつかない変貌を遂げていたのである。「出る杭は打たれる」DNAを持つのは、日本だけではないのである。

一方、札幌はどういうわけか常に「クール」で、そうした場所で即興的に何かを作ることができない。科学的な実験とは呼べない例だが、ある都市文化におけ

るメンタリティを象徴する出来事であった。

(b) 大きなC

アインシュタインの定理 $E=MC^2$ ※3のような、世界観を変貌させるそうした「パラダイムチェンジ」シフトがこれに含まれる。この点で、札幌は絶望的といつていいほど、創造都市的ヒット商品を必要としている。

札幌には映画作りで生計を立てている映像ディレクターは存在しない。ニュージーランドの人口30万人弱のウェリントンという町は、キングコングやロードオブザリングでアカデミー賞を受賞したピーター・ジャクソン監督が暮らす町でもある。なぜ彼がこの町に暮らせるのか、この小さな町が多様なABC（アート、ビジネス、工芸）と組み合わせた映像制作の相互持続経済を支えているからである。

私たちは、札幌圏においては事実上、高レベルで持続可能かつ創造的な仕事で生計を立てる者がいないという点に留意する必要がある。札幌における一つの国際的なヒットが、クリエイティブタイプの新しい波に乗って有用な創造都市の価値経済のサイクルをもたらしてくれるであろう。

(2) T²：TOLERANCE（寛容性）

フロリダは、創造都市はもっとも寛容的な場所であると主張している。札幌はどうだろう。よそ者、性的にあいまいな人々、外国人居住者、急進論者、芸術家といった人々の社会的な受け入れの現状について考えてみる。データに基づいて正確に検証してはいないが、他の創造都市の研究や他の事例、筆者自身による街の観察結果や経験、かつて滞在した創造都市と呼ばれる街についての知識を組み合わせる評価してみる。

(a) 国際市民性

札幌は国際的な街であると書かれているのをよく目にするが、それは勘違いである。札幌市は約2百万人規模の都市の中では世界で最も非国際的な都市であると言わざるを得ない。世界のほとんどの有名な創造都市は、想像的な人材の多くを「輸入」することでそれを成し得た。ロンドンのような巨大都市でさえ、

※3 $E=MC^2$

アルベルト・アインシュタインが特殊相対性理論の帰結として発表した有名な関係式。質量とエネルギーの等価性とも言われる。

エネルギー (E) = 質量 (m) × 光速 (c) の2乗。

驚かれるかも知れないが、輸入した創造性に依存している。

個人的経験だが、函館から札幌に転居を試みた昨年、不動産業者から引越しには第三者の保証人が必要だと聞かされた。保証人という言葉ほど、クリエイティブタイプに嫌われるものがあるだろうか。「保証人」という封建的遺産が人々をしばっているのである。

札幌がなすべきことは、世界から積極的にクリエイティブタイプを受け入れ、国際化の中で次の潮流を生み出すことにほかならない。札幌市役所は、ビザ、宿泊施設及びクリエイティブタイプな外国人に対する税制上の優遇措置を早急に考え直さなくてはならない。

札幌が創造都市たり得ない、別の例を挙げる。それは、筆者が出席した、アンチ創造都市イベントが象徴するものである。テーマはクリエイティブコモンズで、イベントは明らかに国際的透明性を意識したものであったのだが、公式パンフレットには、筆者の国であれば逮捕されてもおかしくない、そんな文章が載っていた。そこでは、外国人について、大学教授、研究者、創造経済起業家、当然、創造産業も含め、そうした人々が“野蛮性”を含んでいると言及していたのである。わずかだが一部を引用する。

どんな危害も与えるな

多くの外国人は日本にいと、マナー違反をたくさんしても、日本人に「良いマナーがなんたるかをわかっていない」と思われているので、結果的に責められずに済むことがあります。しかし、だれが野蛮人のように振る舞いたいでしょうか。良いエチケットについての次のような基本的なルールを知っておくと、日本の主催者に対しあなたが文化的に他者を意識していることを示すことができるだけでなく、新しい友人をつくるのを助けてくれるかもしれません。

こうした無神経かつ外国人嫌いが現れる因子は、創造都市として評価される札幌を破滅に導くことになる。

(b) さっぽろ不老思考

近年日本は、強迫的な非創造都市的な年齢差別の思想と実践という遺物の中で苦しみ悩んでいる。筆者は

この機会を利用し、札幌が日本一の長寿社会になることを提案する。日本では人に年齢を聞くことがタブー視されているということを随所で感じることができ、**「全ての年代にまたがる異なった種類の創造性は、“社会的包括”のコンセプトを実践するものである」**と創造的学者の佐々木雅幸氏が言っている。

(c) さっぽろコミュニケーション

もう一つの寛容性の側面は、コミュニケーション環境。つまりある場所がもともと持っている創造性のための社会的潤滑油である。上記3Tと体系的文化創造性は、コミュニケーションにふさわしい豊かな環境によってのみ支えられる。このコミュニケーションパラダイムシフトにおいて、筆者は、対等、相互に尊重し合うことをベースにしたパラダイムに賛成する。

札幌の新しい創造コミュニケーション環境は、以下の政策により差別化される。

- 札幌は真の複数言語社会になる。
- 丁寧だが上辺だけの言葉が、あらゆるレベルの組織マネジメントにおいて撤廃される。
- ひたむきで正直になること、礼節をわきまえた批評を学ぶことで、「本音」が新たな標準コミュニケーションとなる。

(d) 求む、クリエイティブ公務員！

今、多くの市役所が、創造型人材の雇用を積極的に行うという状況が加速している。実に喜ばしい事態である。全ての札幌市役所職員には、未来志向プログラムと創造産業ワークショップをぜひ受講していただきたい。ブリスベン市役所の職員がみんな未来学もしくは創造産業学の学位を取得していること、創造型人材がパートタイムで働いていることなどは有名である。

(e) 創造都市オフィス改革

有能な人々は創造的な労働環境を求める傾向が認められる。札幌で実際に働いている人々の職場はどうだろうか。札幌市役所は一刻も早く、牢獄ではなく最新式の仕事環境を導入すべきである。その際、PIXAR^{*4}の創造的ワークスペースが一つの基本戦略

※4 PIXAR (Pixar Animation Studios)

世界中から優秀なクリエイターを集めている映画スタジオPIXARは、オフィスが創造的な会社としても有名である。社内の移動に自転車を使い、仕事場は広くスタイリッシュ、ゲームやエンターテインメント施設が設けてあるなど、社員の創造性を刺激する作りに、世界のクリエイターが憧れている。

として大いに参考になるであろう。

(f) 寛容性と公共政策

札幌が必要としているのは、コミュニティコンサルタントと呼ばれる戦略的精神を持ち合わせた人々を介し、人々が従事する効果的公共政策へと浸透させ、真の寛容の社会がもたらす利益を享受する芽吹きである。

ここまで述べた中で読者は、筆者がフロリダの述べる寛容性が含む重要なテーマに触れていないことにお気づきだろう。そう、ゲイと呼ばれる人々と他の性的な逆境にいる人々の問題である。簡単に言うと、フロリダの理論はゲイに対する寛容さが創造都市にとって強力な因子になることを主張している。多くの内情に詳しい人々によれば、札幌は特別な寛容性があるわけではなく、多くの性的少数派に属する人々は差別されていると感じているようだ。

(3) T³ : TECHNOLOGY (技術)

フロリダの創造都市論では、各時代における最新の技術が担う役割は非常に重要なトピックである。研究者たちは、経済成長、クリエイティブタイプと寛容性の間に隠れた強力な相関関係を見つけ出した。氏の著書には「創造的な人々が引きつけられ、ハイテク産業が根付く場所というのは、我々が提唱する、ゲイや自由奔放な人々などを含む多様性の指標のスコアが高いということを見出した」とある。

創造的人材を引きつけるという意味で技術に言及すると、ポイントは大きく二つである。有能で創造的な人々は、出たばかりの新技術に強い関心を持ち、早期に導入を試みることである。

札幌は特段技術力がないわけでもないが、キラリと光る技術都市でもない。しかし、グーグルやソニーの熱烈なファンが主役の新時代には、シリコンバレーや他の先進的な科学拠点を引きつける力を間違いなく持っているはずだ。

創造産業の役割と可能性は、ニューメディアと情報通信技術により強烈に特徴付けられる。創造産業自体、映画やソーシャルメディア産業をはじめとする新

技術によって運用されている。しかしながら、通信技術の価値とはそれが運んでくる情報の質に等しい。ゆえに札幌は、他人の話を吸収するより創造する側となる必要がある。

クリエイティブタイプと創造経済の運び手のための新しいライフスタイルやビジネスチャンスの提供に関して、ICTとメディア技術は最も重要な役割を担っている。札幌で移動しながら「つながらない」とイライラしていることにふと気付くことがある。オーストラリアやニュージーランドに最近出張したときには、その辺のカフェでさえ簡単なアンケートに答えるだけでWi-Fiでつながることができ、この手の問題は起きなかったのだ。筆者の経験では、札幌の大部分がニューメディア技術を利用して海外と活発に交流するよりも、世界に対して鎖国的にふるまうようデザインされていることを暗に示すのである。これでは、創造都市化に逆行していることになる。

(4) T¹+T²+T³+xyz=創造都市さっぽろ?

札幌のような街は3T理論でよい点数を取得できるはずだが、不足している何かがある。札幌が創造都市になるために不足しているものをリスト化してみる。言葉で言い表せない要素、説明できないロジック、新しい恋人たちが持つ独特な「化学」、街の空気、コピー不能なムードを植えつける覇気、フランスの人々が“je ne sais quoi”と呼ぶもの、おそらくこれは決して予測できない、カオスの卵から生まれる驚きとユニークさにあふれた素養である。残念ながら、札幌ではまだ孵化していないように感じる。

4 WEIGHTS : 歴史による妨げ

しかし、札幌を国際的な未来志向ポスト創造都市へと変貌させようと試みるユートピア思想家たちの向上心に対し、今あるものが障害物として立ち塞がることもある。そうした要素を列挙する。

(1) 知覚

知る以前に、まず知覚である。昨年、筆者の講義を受講した学生グループが、創造都市さっぽろのコンセプトを聞いたことがある札幌市民は5%以下との報告を行った。今後は、一連の効果的な戦略、テレビ番組のCMや学校の授業、大学の創造産業／都市に関する講義、毎年開かれるIdeas Festival^{※5}などといった、全市を挙げたプロモーションキャンペーンに発展させなければならない。

(2) 意志力

「意志あるところに道は開ける」という古いことわざがあるが、逆もまた然りで、札幌を創造都市にする集合的意志がなければ、計画がどれほど素晴らしくともなきに等しい。人々は何が大業を成そうとするとき、ときに劇的な変革にプレッシャーをかける必要がある。

(3) 問題理解とその背景

自身が創造都市になることは、創造都市がどのような意味を持つかを理解することを助ける。筆者には、札幌が懸命にそのコンセプトを理解しようとしているようには感じられない。ブリスベンは、プロモートや開発を行う具体的な戦略として創造産業を利用するために、クイーンズランド工科大学に世界初の創造産業学部を設置したという先見性を持っている。これにより、ブリスベン是世界中の創造産業研究者が訪れる基準モデルに成り代わった。基準点を知ること、つまり札幌が他の創造都市群と相対的にどの位置づけになるのかを知ること、創造都市とその向こう側で誰が何をしているかを察知することが必要とされる。



ブリスベン市内にある旧発電所、Brisbane Powerhouseで行われるideas festival、世界中からあらゆる分野で最先端のアイデアを持った人々を招待し、施設内で数日にわたるトークショー、公開討論、映像上映などを行う祭典。同施設では他にも、年間を通してさまざまな創造性あふれるイベントを行っている。(http://www.brisbanepowerhouse.org/)

(4) 恥の文化と遠慮

札幌で出会う人々が時折見せる「遠慮」もしくは「恥ずかしい」という精神性を、しばしば学生の表情に見ることがある。彼らは心の中ではそれをやりたいと熱望しているが、相手に「遠慮」してしまい、たとえ自分の意志に反することでも、クラスの教師が喜ぶ方を選択してしまうのである。

(5) 創造産業と向かい合う認識

Weights（抵抗）は知覚の一種である。一般的に札幌の人々は、創造産業を本物のビジネスや産業としてではなく、単なる社会的装飾と見なしている。「興味深いね、変わっているね、でもビジネスと言えるかな」と。こうした認識は誤りであると断言したい。創造産業と創造都市はイギリスで始まった。イギリスはこれらによって自国の経済がどれだけ躍進したか、最初に気がついたのである。

(6) ストップ・ゴー・フロー

筆者が近頃「ストップ・ゴー・フロー現象」と呼び始めたものがある。ハーバードの創造博士ミヘイリ・チックセントミヘイリの専門用語が元である。創造都市にはスムーズな流動性が確保されていなければならない。しかし、道を曲がれば必ず赤信号、入り口には常に見張り、創造的提案をしる禁止ルールという監視精神は、札幌そして日本において完全に普遍化しており、あらゆる場所に顕在している。職場で部署をたらいまわしにされる比喩としても用いることができる。

5 結論

以上を踏まえ、これらを実現するには今何をすることが必要だろう。まず、コミュニティーへの参加とコミュニケーション。次に、創造都市としての未来の札幌を可視化してみることである。人は、未来の価値を確信するために、まずその可能性の画を必要とする。

最後に、これらの成果を基に、「未来ワークショップ」を行ってみよう。

※5 Ideas Festival

ブリスベン市内にある旧発電所で毎年行われている、世界中からあらゆる分野の最先端のアイデアを持った人々を招待し、施設内で数日に渡りトークショー、公開討論、映像上映など様々なイベントを行う祭典。

筆者は、札幌にとって世界の創造都市、ポスト創造都市に自力で変貌を遂げることが決して高すぎるハードルではないことを確信しており、出来得ることとしてここにあらためて表明するものである。

いくつかの簡単で効果的な戦略を用いた、下書きの域を出ないこの「未来像」を発展させ、変革に向けてささやかでも貢献するべく、筆者が活動を続けていくことを結論として述べたい。

今後は、以下のようなステップを考えている。

- 1) 特にQUT^{*6}創造産業学部の教授が述べる「夜間産業経済^{*7}」を含む、現在研究中の創造都市がもつさまざまな側面を包括的に捉えた、札幌の創造都市指標に影響する計画的なプログラム指導。
- 2) 軽快で同じ考えを持つ創造都市提唱者たちと、実施戦略立案を伴う複合未来像制作の展望を含んだテーマの未来ワークショップを実践する小さなチームの結成。
- 3) 書籍、映像、テレビ番組、参考事例、白書、学術論文といったさまざまな関係資料を所蔵する、気軽に立ち寄れる創造都市準備センターの機能を持つ、札幌の小さな拠点の設立。
- 4) 全ての人々が見、意見を述べ、そのとおりに実践できるような創造都市のコンセプトを伝える方法として、筆者のホームタウンの一つであるオーストラリア・ブリスベン市は、複雑で表面的には分かりにくいコンセプトを可視化した映像音声媒体「都市の未来」を2006年に制作した。この研究を継続する。

*

ここで筆者が描写したイメージはSFのような架空の物語に見えるかもしれない。5年や10年後といった近未来に、札幌は先に提案したような都市への変貌に失敗し、筆者がここを去ることになるかもしれない。しかし、たとえ仮にそうなったとしても、新たなるクリエイティブタイプが、強いクリエイティブスピリットと意思を携えて、本稿で述べたような要素の再提案を必ずや行うことだろう。

(翻訳：三河 宏輔)

※6 QUT (Queensland University of Technology)
クイーンズランド工科大学。

※7 夜間産業経済
創造産業、創造都市やクリエイティブタイプに深く関わる酒場やクラブなどといった夜の経済活動のこと。



ブリスベン市役所が制作した「都市の未来 (City Futures)」のDVD。未来学のキーコンセプトと、地域活性ツールとして、たとえば札幌など何かの都市環境の未来を包括的に選択適用させるにはどうすればいいかを描写する。